



イファット だより

～農民参加なくして農業なし～

第38号



写真：マダガスカルのJICA草の根技術協力：参加者の成果発表会
(本文P2～参照)

目次

- ・P 2 マダガスカル草の根技協：プロジェクト概要とこれまでの経緯
主任研究員 積 奈津子
- ・P 7 現地調整員として活動を進める中で嬉しかった事、難しかった事と課題
研究員 釣本 みずき
- ・P 7 グアテマラでの4年間の活動行動変容コミュニケーション専門家として
理事・主任研究員 小林 沙羅

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

JICA草の根技術協力：マダガスカル共和国 生活改善アプローチを通じた若年女性による 栄養改善推進プロジェクト（マダガスカル語名略称 ROSO） プロジェクト概要とこれまでの経緯

プロジェクトマネージャー
主任研究員 積 奈津子

2025年度よりマダガスカルで実施している草の根プロジェクトについて紹介する機会をいただきましたので、この1年間の進捗をご紹介します！

1. 案件の概要

対象地域：アムルニマニア県 3市：イメリニマディ市（Imerin'Imady）、イヴォニ市（Ivony）、マルスア市（Marosoa）

プロジェクト目標：生活改善アプローチを通じて若年女性の栄養改善行動が実践され、栄養改善を支援する仕組みが構築される

成果：

成果1. 生活改善アプローチを活用した栄養改善を促進する人材が育成される。

成果2. 生活改善アプローチを活用した栄養改善の手順が再整備・改善され、手順に沿って若年女性が栄養改善行動を実践する。

成果3. 若年女性の栄養改善行動を支援するための住民主体のサポート体制が構築される。

カウンターパート機関：アムルニマニア県栄養局（ORN）

協力機関：アムルニマニア県水・衛生局（DREAH）、アムルニマニア県農業畜産局（DRAE）、アムルニマニア県保健局（DRSP）、NGO草の根開発基金（TFI）

* 各県局からは県局ファシリテーター（FR）を2名ずつ選出（合計8名）、TFIからはコーディネーター（CDN）とローカルファシリテーター（FC）4名がチームとなって活躍してもらっています。

全体事業期間：2025年4月～2028年4月（3年間）

対象者（プロジェクト参加者）：対象農村3市の若年女性（15歳～25歳）合計 90名（各市 2グループ×15名×3市）、同若年女性の栄養改善をサポートする住民 180名（各市2箇所×30名×3市）



2. プロジェクト名そしてスローガンに込められた思い

このプロジェクトでは、これまでNPO-イパットがコスタリカやエルサルバドルで実施してきた生活改善アプローチを十二分に活用しながら、マダガスカル農村地域で、栄養改善のために「自分たちで考え、楽しんで周りを幸せにしながら、実践する Mieritreritra, Manatanteraka, Ampifaliana」女性たちを育成することを目指しています。

このスローガン、本邦研修に参加してくれた関係者たちが中心となって考えてくださったのですが、自画自賛

ながらとてもいいスローガンだと思っています。プロジェクトに参加してくれた女性たちにどんな風になってもらいたい？ 私たちが目指す女性ってどんな人だろう？と話を進めてもらったところ、「自分たちで考えて実践する、でもそれを楽しみながら、そして周りを幸せにしながら実践している人だ！」と定義づけてくれました。この討議に生活改善の思いが詰まっていると心から思います。というのも、「楽しく続けること」が生活改善を続けていく上でのキーとなるポイントですし、この共通認識があるからこそ、対象地域でワークショップを実施するときにも、参加者たちは笑顔が多く楽しそうに活動を実施しています。物やお金を配るプロジェクトではないからこそ「楽しく続けること」そしてその様子を見て「周りを幸せにしていくこと」をプロジェクトで共通認識として持っていることは、このプロジェクトの強みだと認識しています。（このスローガン設立の討議では、NPO-イフパットの小林理事が大ききリードしてくれました！ コスタリカ・エルサルバドルの知見が詰まっています！）

話は戻りプロジェクト名 in マダガスカル語バージョン。Resaka hOentina hanatsarana ny fiainanasy ara-tSakafo ho an'ny Ona Amoron'i Mania（略称 ROSO 日本語での発音はルス）、抄訳すると「アムルニマニア県人々の生活と栄養を改善するための対話」です。最後の「Ona 人々」というところ、標準マダガスカル語だとOlonaという表現になるのですが、アムルニマニア県の方言を用いてOnaという表記になっています。これもプロジェクトに関わるファシリテーターが考えてくれた案なのですが、「自分たちのためのプロジェクト」という思いが大きく込められていると思います。このROSOという略称名、現地では「Roso ity tsa mipody koa（引き返すことなく、前に進んでいく）」という諺ともかけてあり、なかなかおしゃれな表現だと気に入っています。また、「対話」という言葉を入れているところも、こだわりポイントです。

さらにさらにROSOロゴにもぜひ着目いただきたい。1番目のOはマダガスカルで推奨される食品グループを表しており、2番目はプロジェクト地アムルニマニア県の人々の伝統的な帽子の柄を表しています。ここにも「自分たちのためのプロジェクト」という思いが反映されていることがご覧いただけるとと思います。



図：プロジェクトのロゴ ROSO（日本語の発音はルス）

プロジェクトに関わる大事なことは、ファシリテーターとも討議を進めながら、合意の上で物事を決めていっています。一つひとつ話し合っ進めることは時間も手間もかかるし、面倒くさい面もありますが、ファシリテーターの方の「自分が関わっている」というコミット確保には繋がっているのでは（繋がっていてほしい）と想像しています。この面倒くさい議論を上手に進めているのは現地調整員の釣本さんです。この後の方で彼女からの寄稿もありますので、ぜひ最後までお手を止めずに読み進めてくださいませ。

プロジェクトの立案経緯は、イフパット便り 33 号も合わせてご参照ください。和田理事の助言のもと実施された内容が詰まっています。現地の様子の写真も盛り沢山ですよ、ぜひこちらもご覧ください！

3. プロジェクトで実施している取り組み

ではプロジェクトでは実際にどんな取り組みをしているのかご紹介します。メインの取り組みとして「ワークショップ」「家庭訪問」「グループ活動」に分かれます。

ワークショップ：

ワークショップは全部で8セッションに分けられ、これらのワークショップを通じて、参加者たちは現状分析と計画立案を行います。特に参加者の人たちに響いているワークショップをいくつか共有します。

幸せツリー：「自分にとっての幸せとは何か」を考えるワークショップ。自分にとっての幸せをまず考えてもらい、そのためにどんなことができるのかを考えていきます。よくテーマとしてあげられるのは「家族」「健康」。そのために何ができるかを考えていくと、「健康」というテーマからは「手を洗う」-「手洗い場を設置する」、「トイレを使う」-「トイレを建設する」（詳しくは後述

しますが、マダガスカルは屋外排泄も多いんです）、「Sakafo Maro Loko（複数の食品グループを食べる）」-「家庭菜園を始める」/「新しい料理を覚える」など、少しずつ自分ができることが見えてきます。「幸せ」を入りにしていますが、そこから栄養改善につながるポイントは必ず出てきます。栄養改善につながる行動はすぐに始められること、そして自分の幸せにつながっていくことを可視化することで、活動に取り組むモチベーションを上げてもらう役割を担っています。



写真：幸せツリーを実践している様子

うんちの道 (F-diagram) : プロジェクト実施地域では、衛生環境が悪いことも栄養不良の一因と考えられています。栄養豊富な食材を食べていても、衛生環境が悪いせいでお腹を下してしまったり、適切に栄養を吸収できないなどの問題も起こるためです。マダガスカルでは複数家庭でトイレを共有すること、そもそもトイレを持っていないこと、あるいはトイレがあっても衛生的な基準（床が掃除できる、穴に蓋がある、匂いを防ぐ灰がある、手洗い場が近くにあるなど）を満たしていないことも多々あります。加えて、農村では、水を手に入れるためには、近くの井戸や表流水まで水を汲みにいく必要があり、手洗いの頻度や飲料水の品質も改善の余地が多々あります。このワークショップでは、「うんちの道」と称して、屋外排泄をした場合に、そこに含まれる菌が、どのように人の口まで運ばれるのかを図を自由に動かしながら考えます。そして、どんな対策をすることで、その菌が運ばれることをストップできるのか、ということも合わせて考えていきます。

家庭マッピング : こちらもとても大人気のワークショップ。自分の家を紙に描き出し、好きなところ、すぐに改善できるところ、長期的に改善できるところを考えてい

きます。鶏が調理をする台所を歩き回っているのは良くないよね、牛舎の掃除をずっとしていなかった、部屋の中の整理整頓をしたい、など自分の生活の基盤となる家を整えることを目指します。一見栄養改善には関係ないようにも見えますが、衛生管理の向上や家庭菜園をするためのポテンシャル探しなど、栄養改善につながるポイントもたくさん見つけることができます。

ワークショップでどんなことを実施しているか、イメージはほんの少し伝わりましたでしょうか…？ワークショップに参加した方はみな、ワークショップの内容を元に自分ができることの計画を立案します。現状を分析し、自分ができる計画を立てること。「できることを少しずつ」が始まる瞬間です。

家庭訪問 :

丁寧にプロジェクト参加者(*)に寄り添うために、ローカルファシリテーターが2ヶ月に1回、3回程度の家庭訪問を行います。この家庭訪問を通じて、前述のワークショップで考えた計画が実践されているのか、何か困っていることはないか、聞き取りを行います。FCがメインで担当しているのですが、ある参加者からは「自分の現在の生活と理想のギャップが大きく、挫けそうな時もあった。でもFCがいつも気にかけて『できることからやったら良いんだよ』と励ましてくれたおかげで、活動を進めることができた」と話が出てきました。丁寧に参加者たちをフォローし支えることができるのも、草の根プロジェクトの醍醐味だと感じる瞬間です。女性に寄り添った励ましの言葉をかけているFCも、感謝の気持ちをきちんと言葉にして伝えてくれる女性も、みんなすごい！

*生活改善アプローチのプロジェクトでは、プロジェクトに参加してくれる方を「受益者」ではなく「参加者」と呼んでいます。プロジェクトから一方的に対象者を決めるわけではなく、プロジェクトへの参加自体も自由に住民の方に委ねられているからです。最初にこの呼び方をイフパットの和田理事から教えてもらった時に、とてもいい使い方だなと思ったことを覚えています。

グループ活動 :

8回のワークショップを実践したあとは、グループ活動そして技術的なセッションを実施します。裏作の実践方法や、理想的なトイレの作り方など、栄養改善に貢献する技術内容を学び、それをグループメンバーと実践、あるいは家族や村と共有してもら

う予定です。ちょうどこの技術実践が4月から始まるころ。その様子については、次回の機会でご報告させていただきます！

・本邦研修の取り組み

本邦研修を2週間実施しました。実際にこのプロジェクトで実施しようとしていることを理解してもらうために、日本の生活改善のセオリーや、家庭科の授業の概要を学ぶとともに、女性農業士のご家族と幸せツリーの実践、そして生活改善活動の実践者たちの意見交換を大いに含む群馬県への視察を行っています。

特に群馬県での視察では、元生活改良普及員、元群馬県農政部長のご指導のもと、多くの先駆者の話を聞きに行きました。高崎市倉渕町では、長年生活改善グループを率いてきた「あじさいグループ」リーダーの方より、「グループ活動が続く秘訣はメンバーや家族、周りの人に感謝を伝え続けること」「家族や地域の人々の理解を得るためには、自分たちが実施している活動を共有して協力してもらうこと」といった実践に基づいた事例を伺いました。加えて、倉渕に新規就農者として移住したご夫妻からは、最初にあじさいグループや他地域リーダーの人から指導・サポートいただいていたこと、その後に農業や生活が軌道に乗り始めて今では次世代の若者たちの指導をしていることをお話いただきました。地域のリーダーが世代を超えて引き継がれていること、そしてご夫婦平等に取り組まれている姿は、参加してくれていた研修員の方たちにも多いに心に響いたようです。

マダガスカルへ帰国後、「生活改善がどのように実践されているのか、何をプロジェクトで目指したいのか、具体的なイメージを持つことができた」と皆口々に話をしてくれました。この具体的なイメージを持てたことが、前述のプロジェクトで育成したい女性のスローガンにつながっています。

また、すぐに使える技術を押し付けがましくなく、さりげなく共有してくださるのが生活改良普及員さんのすごいところ。何十年に亘り活動を続けてこられた生活改善グループのリーダーの集まりであるプラチナレディーズの皆様との討議では、「楽しんで活動を続けてこられたことが一番」と実践者の声を説得力を持って伝えてくださりました。また、庭でとれた鬼ゆずのジャム（マーマレード）をお土産にくださり、ここからヒントを得た研修員は、プロジェクトの女性たちと桃ジャム作りに取り組みました。



写真：本邦研修で学んだジャム作りのアイデアを活かして桃ジャム作りをしているところ

本邦研修を経て特に印象的だったコメントに「最初は支援される側だった方が今度は次世代へを育成する側になってきている変遷を伺うことができた。自分たちのプロジェクトで参加してくれた女性たちがプロジェクト期間で成果を出すのはもちろんだが、次世代のリーダーとなって活躍してくれることを見据えて女性たちの育成に取り組んでいきたい」と話してくれた研修員がいました。プロジェクトの短期的な成功を目指すのはもちろんですが、プロジェクトの成果が継続されるためにも、長期的なビジョンを持ってコミットしてくれていること、とても嬉しく感じました。

加えて、本邦研修期間中に、「普及活動は住民や農民のために存在している、住民を中心とした取り組みだ」ということを普及員の大先輩から学んだ研修員たち。これまでは行政官としてプロジェクトとそれに伴うお金や支援物資を農村に持っていく立場から、「自分たちがパトロンだ」という考えが組織に根付いていたことに気づいたとのこと。自分たちがパトロンだから、住民との待ち合わせに遅れても平気だし、何かの会合の準備もすべて住民たちがするのが当たり前だと考えていたが、住民中心の考え方を知ったことで、住民との待ち合わせ時間や約束は尊重すべきもの、準備も怠らないようにしていくこと、と気持ちを切り替え、同僚にも共有しているそうです。他にも、「住民との研修の約束と、公務員としての人事との面談の約束が重なったことがあったが、住民の約束を優先させた。なぜなら、自分の仕事にとっては住民との約束が大事であり、約束を反故にすることは住民との信頼関係が損なわれると思ったから。人事との面談は別途調整して事なきことを得たので問題ない。」と嬉しそうに語ってくれる研修員もいました。

・女性たちの活動事例

現在はプロジェクト開始からちょうど1年経ったところ。女性たちの変化が少しずつ現れてきました。2026年3月に頑張る女性たちを集めて共有会をしています。その時に話してくれたこと、家庭訪問で語ってくれたこと、女性たちの生の声をお届けします！

ミアリさん：幸せツリーの参加を実施して、自分たちの幸せは「家族が平和に暮らすこと」そのためには健康で衛生状況に留意することがあると気づいたミアリさん。自宅にトイレはあったものの、壊れて穴が空いていたので、子どもが落下してしまうのが怖く、使っていなかったそう。そのため、トイレを作ることを決意！子ども2人と実母の4人で暮らす女系家族の彼女は、新設のトイレの穴を掘るために、近隣の男性にお金を払って依頼、屋根や扉の材料も少しずつ集め始めました。この地域では、トイレ建設を自ら実施することは珍しいらしく、トイレを作っていることを周りにも馬鹿にされることもあったとか。FCの励ましや彼女の強い意志もあり、トイレは少しずつ少しずつ出来上がっています。



写真：ミアリさん トイレが少しずつ出来上がっていく様子

タヒナさん：子ども2人と暮らすシングルマザー。日雇い労働で日銭を稼いでおり、以前は稼いだお金を全て使っていたとのこと。ROSOに参加するようになってから、コメ・塩・砂糖の買い置きを始めたそうです。この買い置きがあるので、今は子どもが病気になって日雇い労働に出られなくても、食べるものには困らないという安心感を得ることができたと誇らしげに話してくれました。買い置きを準備するというアイデアはプロジェクトで最初から考えていたものではありませんが、食料安全保障を向上するためのこんな取り組みができるのか！と目から鱗のアイデアでした。生活を良くする知恵はいつも住民側にあると、教えてくれています。また、最近ではグループ活動を始め、裏作の時にも葉物野菜を食べられる・売れるように、葉物野菜の栽培も始めました。

オセアンさん：彼女はまだ中学生ですが、とても積極的にプロジェクトに参加してくれています。彼女はトイレを新しく作り直しました！なんと朝4時におきて！最初は家族も「何をしてるんだろう」と遠巻きに見ていたそうですが、彼女の熱意に押されて手伝ってくれたとのこと。今では、トイレに手洗い場も設置され、トイレをきれいに保つための掃除も頑張っています。これも朝4時の学校に行く前から。また、中学生のグループメンバーと一緒に、学費を稼ぐためのきゅうり・葉物野菜栽培を始めました。このグループ名がまた素敵で「Mamiratra（生活が輝く）」といいます。コミュニティの人の手本になれるように、この名前を名付けたんだそう。未来のリーダーの芽が出始めている様子を感じます。



写真：オセアンさん トイレを作り手洗い場を設置した

え、なぜこんなにこの地域にはシングルマザーが多いのかって？いい点にお気づきです。本当にプロジェクト対象地域にはシングルマザーの家庭が多いんです。男性たちは沿岸地域の商業地帯に出稼ぎに行っている暮らしをして、出稼ぎ先でも家族を作っているとかいないとか。お祭りの時期だけ農村に帰ってきて、いい暮らしを見せびらかし、子作りをして、嵐のように去っていく。日々の仕送りがあるわけでもなく、暮らしの糧を得て子どもを育てていくのは女性たちです。決して楽な暮らしではないと思いますが、そんな女性たちが、栄養改善のために「自分たちで考え、楽しんで周りを幸せにしながら、実践する Mieritreritra, Manatanteraka, Ampifaliana」ことを一緒に応援できること、とても誇らしく思っています。

この他にも、保健センターで廃材を使ってベッドを改良した、高校生の通学路にある自宅トイレを開放することで屋外排泄を削減した（匂いも臭くなくなった！）なんていうコミュニティレベルでの実践も出てきています。そろそろ紙面が足りなくなってきたので、また次の機会をいただけた際に。

と、色々、良いことばかりを記載していますが、プロジェクトマネージャーである筆者は日本から悠々とプロジェクトを見ている立場です。現地調整員として頑張っている釣本さんが一番頑張ってくださっていること間違いありません。彼女の奮闘記も合わせてお読みください！ファシリテーターたちの変化も丁寧に記載していただいています。

また、プロジェクト運営にあたっては、事務型の頼もしい後方支援の佐川職員の力にも大いに助けられています。チームROSOのメンバー、とても誇らしいんですよー！紙面が足りません！



現地調整員として活動を進める中で嬉しかった事、難しかった事と課題

現地調整員

研究員 釣本 みずき

私が最初にマダガスカルに渡航したのは2025年の5月。最初にした事は、家探しと運転手付きレンタカー探しと、挨拶回りと、事務所探し。そして同時にプロジェクトのキックオフのための準備と、ローカルファシリテーター(FC)の応募から候補者の選別と面接。それをたった2週間でやり遂げねばならなかった。それも全く思うようには進まない、のんびりとしたこの国で。病院で看護師しかやった事のない私にとっては、プロジェクトを進めるという事が右も左も何もかもわからず、初めての事、初めて聞く用語だらけの世界だった。それでもなんとか積さんとキックオフミーティングをやり遂げ、ファシリテーターも決まり、“ROSO”というマダガスカル語のプロジェクト名が決まってROSOが始動した。ひとまずやってみよう！と始まったのが2025年6月11日。

FCを決める時には、人生で初めて人を面接する側に立ち、人を選ぶ。自分の目が試されていると感じた。しかし、私が選んだ最初のFC2人はたったの1カ月で辞めてしまった。その時私は自分の目が信じら

れないと思い、自信を喪失した。しかし、ROSOにとって奇跡だったのは今のマダガスカル側のコーディネーターに出会えた事である。彼女だけは初めからROSOに対して、何も物もお金ももらえないプロジェクトだから"できない"とは言わなかった。マダガスカル人の中にも理解してくれる人がいるのだと思い、希望が見えた。しかし、FRやFC達は幾度もその壁にぶち当たった。市長にプロジェクトの話をした時、市役所で研修を始めた時、村人達からでさえ"何ももらえないプロジェクトに参加する無駄な時間はない。"と言われ、実際に研修にはほとんど誰も参加してくれない。そんな状況が続いた。ファシリテーター達も心が折れかけ、その度にROSOがどんなプロジェクトなのかを理解しようと、チームメンバー内で何度も何度も話し合いを重ねた。すると、まず変化が見られたのはFR達だった。1人、また1人と"ROSOはお金も物もあげないプロジェクトだけど、知識はもらっても誰にも盗られない、壊れないんだよ。"と村人達に説明するようになった。日当が発生しなくても、研修に参加したり、研修を実施してくれるようになった。また、少なからずも研修に数回参加してくれていた女性達にも変化が起き出した。ROSOでは"自分の幸せ"について一緒に考えただけなのに、自分でお金を貯めてトイレを作り出した。家庭菜園を始め出した。手洗い場を作り出した。女性達の中に自然と変化が生まれ出した。私はとても嬉しかった。またそれはファシリテーター達も同じだった。ROSOのようにお金も物もあげないプロジェクトでも、人は変わるんだ！と気づいた瞬間だった。



グアテマラでの4年間の活動 行動変容コミュニケーション専門家として

イフパット理事・主任研究員 小林沙羅

2026年1月をもって、4年間行動変容コミュニケーション専門家として参画してきたグアテマラ国「プライマリー・ヘルスケアを通じた母子栄養改善」技術プロジェクトが終了しました。通算10回の現地渡航を通じて、主にコミュニティレベルで母子栄養改善を推進する人材育成に関わってきました。グアテマラ西部高地にあるトトニカパン県で、母子の栄養改善を実現するため、活動はカウンターパートである保健省の一次保健医療従事者を対象にファシリテーター研修から始まりました。研修では、コミュニティの母親達が自

ら当地で深刻な慢性栄養不良の課題について解決のための計画を立て、実践していくために住民参加型の生活改善アプローチを導入しました。実施当初は保健医療従事者の中から、「住民は無知なので、指導が必要。」といった声上がるなど、戸惑いも見られました。



写真：母子栄養改善を推進するための教材を手に取るコミュニティ・リーダーと筆者

その後は、ファシリテーター達と一緒に山間にある37対象コミュニティを回り、保健委員会、伝統的産婆、有志の母親達に母子栄養改善に関する講習会を行ってきました。講習会ではまず個人として、家の中を走り回っていた家畜の屋外飼育や、孫のために手洗い場を作る、などの家庭内の衛生改善の活動から始まり、野菜や果物をより食べるための家庭菜園など、改善計画が立てられました。お金をかけずに出来る個人の改善活動は、栄養価の高い食べ物を子どもにあげるようになり、男性優位が色濃い当地で父親が子育てに関与するなど、活発に行われるようになりました。

講習会参加者は、母子栄養改善コミュニティ・リーダーとして育成され、自らの経験と母子栄養改善に関する知識をコミュニティに住む妊産婦や5歳未満児とその母親に波及する活動が展開しました。長年の慢性栄養不良の課題から、数々のドナー機関への援助依存が高まっていた当地で、無償のボランティアとして276名の母子栄養コミュニティ・リーダーが、家庭訪問やコミュニティ集会、学校訪問を通じて、主体的に発信するようになりました。あるコミュニティ・リーダーはそのやりがいを、「母親達に、おかげで子ども達が健康になったと言われ、感謝してもらえる。」と話していました。

他のコミュニティ・リーダーは「色々な援助機関から研修を受けてきたが、このプロジェクトほど自分が主体的に参加したと感じたものはなかった。学んだことは今も自分の中に残っている。」と語ってくれました。自身も5歳未満児の母親である、保健委員会のメンバーは「第一子は低体重だったが、プロジェクトから学んだことを実践したことで体重が増えた。これの学びを他の人と共有することが大切だと感じている。保健委員会の他のメンバーとは家族のような関係で、仲間たちと母子栄養改善の活動ができることを幸せに感じている。活動計画の実践を通して、コミュニティの子どもたちに変化が見られている。」と語りました。

コミュニティの現場でこれらの活動をリードしてきたファシリテーターとなった保健医療従事者は、プロジェクト終了時のナレッジ共有ワークショップにて「住民を一方向的に指導するのではなく、尊重と共感をもって接することの重要性を学んだ。コミュニティ・リーダーの思いや経験に耳を傾けることで、主体的な行動変容が促されることを実感した」と振り返っていました。



写真：ファシリテーターによる家庭訪問を通じて、住民との対話や寄り添いが促進された

イフパットだより38号に寄せて

日本の生活改良普及員の活動から学んだ「生活改善アプローチ」の考えと手法が、国際協力の「生活改善」「栄養改善」活動現場で使われています。自主的な行動変容が促がされ、「自分たちで考え、楽しんで周りを幸せにしながら、実践する」住民が生まれています。

編集文責 永井 和夫

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL : 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <https://npoifpat.com/>